第九句集

『風信帖』

【風信の届け先】

九月沈思のとき批評家の笑みて逝く　（昭和五六年）

はじめから番外編風で申し訳ないが、この句集の性格の一つとして、最初に触れておいた方が分かりやすいと思うので、ここに挿入させていただこう。

『風信帖』というのは、もともとは空海が最澄に宛てた書簡を集めた名筆の一巻の名称。八束がこの「風信」という題を選んだのは、あとがきにあるように「（この四年間に）気付いてみると、詩人三好達治先生の十三回忌をすませた後のこの時期、私はずいぶん多くの先覚・先輩・知友の逝去にあって、その葬送に参席してゐる。（中略）道山の三好詩人にそのことの風信をおくる意味をもこめて、この表題「風信帖」を用ゐたことを、先人や多くの読者にお許し願っておきたい」との気持ちからであった。

以下に、それらの追悼句を一句ずつ一覧しておこう。いかに多いか、そしてそれぞれに対していかにふさわしい弔句を手向けているか。（句の後の名前は作者名ではなく、八束が句を手向けた逝去した方の名前である。）

手の影の泳ぎてゐたり油照り　福永武彦
遺影鎮む野草秋草乱れ咲き　中野重治
霜の針に散りてささりし寒牡丹　菅井静子
小夜時雨とて通夜の花かつぎゆく　下条八峰
鴻儒の瞳しづむ道山の後庭花　吉川幸次郎
さざなみの向うの桜ひと煙り　鈴木鬼涙
愚兄賢弟といふ人の死のおぼろかな　池島もとじ
心屈しゐて見る波に菱の花　唐木順三
詩鷗みぞれの声は北より来　富山放浪
粉河寺のほとりに逝くか霜仏　木村恵洲
伊世路逝く冬黒曜の瞳の澄みに　渡部伊世路
雪くるとにはかに崩る筑波山　市川花庭
デスマスク花にかげれば詩人消ゆ　堀口大學
詩篇よむ納棺の彌撒虫しぐれ　河上徹太郎

圧巻は河上徹太郎に対してで、十句を捧げている。冒頭の作は、それらの第一句。〈九月沈思のとき〉という寸鉄詩めくフレーズは現代批評家の河上徹太郎への敬意に満ちている。かつて三好達治へ向けたのと同様の、最大のオマージュではないか。日頃は心休む間もない批評家は、ようやく最後に〈笑みて逝く〉ことができたのだろう。

雪月夜白馬しづみて海となる

（昭和五三年）

幻想的な句。月の煌々と照らす雪夜に、白馬が現れたと思ったのもつかの間、その海の幻影は沈みこんで、目の前にはいちめんの冬の海がしらじらと残った。そんな超現実主義のような句に見えるが、この句で八束は何を伝えたかったのであろうか。日常の家庭生活と作家生活との苦闘の中で、垣間見た涅槃境ではなかったか、とさえ思う。いつか『黒凍みの道』で見せた、〈黒凍みの道夜に入りて雪嶺顕つ〉の幻想的な光に焦がれるような雰囲気が、この白馬の句にも感じられる。白い光で編んだこの詩的イメージは、垂直性と水平性と両方得ていて句柄が大きい。

氷下魚（こまい）釣り顔の淋しさかくしをり

（昭和五四年）

氷魚釣りというのを体験したことはないが、その風景は間接的に見聞きしている。たとえば氷湖の厚氷に小さな穴をあけて、手先で操るような単純な釣り糸を下ろして、根気よく魚がかかるのを待つようだ。寒風の吹きさらしになるので、防寒頭巾や顔被いなどをしているのだろう。目だけきょろりと見えるようないでたちか。それを八束は「淋しさをかくしている」と感じた。釣り人は別段淋しいわけでもなかろうが、いつも胸に風の音を聴いているような八束にとっては、この世の淋しさを感じ取ったのだろう。こう形容されては楽しみに浸っている釣り人たちは口を尖らせるかもしれないが、俳句としては型に収まって細身のよさがでてくる。張りつめた寒中の大気に触れるようなｋ音のひびきにも注意したい。

白炎をひいて流氷帰りけり

（昭和五四年）

春先になって流氷が離岸し、沖へと帰ってゆくとき、氷のかたまりがぶつかり合いきしめき合って、大きな白炎をあげているというのだ。たいへんダイナミックな句だが、ここにも八束の白い炎、つまり白い光への嗜好が見えておもしろい。私はこの句に接していると、いつもこの流氷が八束自身の魂の炎立ちに見えてくる。八束の詩精神が、みずから白い光を編み、その光を自らにまとわせてこの世を遠ざかろうとしているようだ。八束の北方への志向は、このあたりから急速に深まり、心象性が増してくるのではないか。

八束の自解文をすこしだけ引こう。「この年は流氷は四、五百メートルの沖

に氷山のような断崖の肌を見せ、朝は岸まで来、午後は沖に去る。そのとき紺青の海に白い氷煙をあげてゆく壮絶な景観に息をのんだ」（石原八束：「俳句研究」昭和六十一年二月号）

俳諧や斧鉞（ふまつ）一閃の蟻地獄　（昭和五四年）

「俳諧」を思い浮かべながら、眼前の蟻地獄を引き寄せてくるおもしろい手法の句。「古池や」の先例があるではないかと言われそうだが、「俳諧や」の方が大分観念的か。蟻地獄はウスバカゲロウの幼虫だが、二つの鋏に似た顎をもつ。実際には、この鋏の形状的な類想から「斧」に及び、さらに、意味の連想から「斧鉞（＝添削）」に至ったのであろう。

俳諧に向き合って、身を削る思いでばっさりと句を落としたり、思いきった朱筆を加えたりする。その「斧鉞」をふるう自分は、どこかこの蟻地獄のようではないか。そんな、イメージを思い浮かべる。八束特有の自虐的なブラックユーモアだと思うが、もちろん斧鉞の返り血も浴びながらの作業なのである。実際の蟻地獄は相手を殺してしまうが、俳句の斧鉞は相手を生かすためのもの。この点だけは、八束の名誉のために言い添えておかねばならない。ここに本句の諧謔がある。

香水を知つてをるなり去りにけり　（昭和五四年）

こういう句を単独で示された場合、ふつうはどのように受け取るのだろうか。「香水の女は去つてしまひけり」くらいならば、いっときの火遊びの傷跡のようなものかもしれないが、八束の句の場合、「知つてをるなり」（＝香水くらい十分に知ってはいるさ）とまずは自明のことだとばかりに強がりを見せる。そして、直後に「去りにけり」（＝でも去ってしまった）と不在の状況を示し、二つのフレーズの乖離あるいは落差を利用して、言外にさびしらなニュアンスを醸し出させる。この句が、通俗的な感情を少し超えて、寂寥感と透明感を感じさせる「香水」になっているのは、以上のような仕掛けにあるのではないか。余白を多く取りながら、心理の綾はしっかりと示されている。

梅干すは風樹の嘆に似たりけり　（昭和五四年）

「風樹の嘆」とは中国の故事の「樹慾静而風不止、子慾養而親不待（＝樹静かならんと欲すれども風止まず、子養わんと欲すれども親待たず）」にもとづく成句で、「孝行したい時には親はなし」というような意味合い。「風木の嘆」ともいう。梅を干す母親のつつましい行為と、その干される梅の実の赤色に、郷愁めいた風景を感じ取り、十分に孝行できなかった自分を顧みて慙愧の念に駆られているのであろう。もちろん、八束の個人的な事情もあるが、それは知らなくても普遍的な意味合いは汲み取れる句だと思う。

ケルン積むあなた花野に霧の影　（昭和五四年）

木曾駒ケ岳に登高したときの句。三千メートルに近い山だから、霧がかかるとあっという間に視界は遮られ、霧が晴れると視界はどこまでも広がる。この句では、ケルンを積んで、ほっと休息。はるかを見渡すと、彼方の花野に霧の影が移ってゆくのが認められたというのであろう。

中七には「あ」音が五つ連続する。また、N音が一つ出現した後、一息ついて三つ連続する。これによって、「あなた」というやや古風ながらも浪漫的な調べの語が生きる。

もちろん、この「あなた」は「かなた」の意味だが、郷愁めいた人懐かしさをふくむ言い方でもある。カール・ブッセの「山のあなた」の詩句を思い浮かべる向きもあろう。私の世代にはなかなか使えない語である。

「ケルン積む」という個人的な行為は、中七に及んで読者の共通感情に入り込みながら、音韻的にも大らかな広がりを見せてゆく。それは、この句を〈ケルン積むかなた花野に霧の影〉あるいは、〈ケルン積むはるか花野に霧の影〉と言い換えて比べてみれば一目瞭然のこと。共に景を叙しただけで、八束の原句から感じる人懐かしさはまるで生まれてこない。この叙情の深さを八束のこの句から学びたい。

一方で、この句では、視覚的にもケルンを積むという手前の点景から、はるか前方の広がりへと転換が図られている。「霧の影」はややあいまいな置き方だが、山の霧は動いてゆく方がふつうのあり方であろう。霧の影が移動してゆくにつれて、ふたたび花野の明るさが現れてくるさまを捉えたものだと解釈してみたい。

白鳥に流れ寄りくる薄氷

（昭和五四年）

句意は平明。一句独立した読みをすれば、舞台はどこでもよい。白鳥に薄氷がすいと流れ寄って来たという句。この句のポイントは二つあろう。

一つは、「流れ寄りくる」という表現。「流れ」までは客観的描写だが、「寄りくる」には客観だけでなく主観も加わる。「薄氷」が白鳥を慕って、その傍らに寄ってきたような、親しみを覚えるのだ。もちろん、理屈で考えれば、薄氷が寄ってきたのは、白鳥が身を動かして水にくぼみを作ったり、風が吹いてきて湖面の薄氷を押し出したり、さまざまな状況が思い浮かぶ。だが、その自然科学的な「理」を超えなければ俳句の詩は生まれないだろう。この句の親しみがもとにあって、いかにも白鳥と薄氷が仲良くしているようなユーモアにつながるのだ。

ポイントの二つ目は、「薄氷」という下五の季語であろう。これから厳しい寒さに入る冬の初めではなく、風雪の厳しさを乗り越えて氷も薄くなる頃、すなわち春の息吹を感じ始める頃である。中七の句の「親しみ」とユーモアを、八束は下五の春到来の兆しで温かく支える。

季語がやわらかく働いて、「白鳥」と「薄氷」の間にほのぼのとした感情の交感が生まれるのは、こうした表現のはからいがあってのこと。強い言葉を使ってのインパクトこそ少ないものの、春の到来を白鳥も作者もしずかに喜んでいるような、あたたかいまなざしの句だと思う。

芋虫の寄るとき露の笑ひけり

（昭和五四年）

へんてこな句だ。せいぜい虫愛づる姫が愛でるかもしれないくらいの代物。芋虫はどちらかと言えばグロテスクイメージの虫であろう。あまり好きではない人の方が多いのではないか。この句では、芋虫が這いすすむとその重みで多少揺れたのであろう。露がすこし震えて、そのさまが笑ったように感じられたというのだ。ニンゲンの目を介すると醜悪なイメージが現出するのが関の山だが、芋虫と露だけの世界を作ると睦まじい対話が生まれる。芋虫は八束の分身とも見えてくるから愉快。露の玉が芋虫（＝八束）を歓迎するようなユーモラスな世界が現れるのだ。このどこかほろ苦い味わいをもった笑いも、八束がときおり見せる世界である。

落葉松に真綿のひかるスガレ追ひ　（昭和五四年）

スガレとは地蜂（＝クロスズメバチ）のこと。小型でおとなしい蜂で、地中に巣を作るらしい。この幼虫が珍味なる「蜂の子の佃煮」になるとのこと。いくつかの話を総合すると、夏～秋にかけて、真綿を付けた蝉や蛙の肉などをカラマツの枝にかけておくと、スガレがそれを巣に運んでゆく。その真綿の目印を追いかけて巣を見つけるのが「スガレ追い」だそうだ。井伏鱒二の随筆にもこの話がある。

八束は井伏鱒二とも交流があったから、実際にこの光景を案内してもらったのか、あるいは話から想像して詠んだのかは分からない。それにしても、「スガレ追い」を知っている人ならば、その説明にすぎないというかもしれないが、私のように知らない読者にとっては、たいへんいきいきと鮮明な映像が浮かび上がる。あたりの空気の澄んだ様子と作者の心躍りが伝わってくる。

ちなみに、井伏鱒二もスガレを飼っていたそうだ。その話は、『稀れな仙客』（石原八束：角川書店刊）にも出てくるが、この句集にも、次の形で収められている。前書に「信州高森井伏先生山荘」とある。

スガレ飼ふ軒より仙翁咲くを見る　八束

韓国の妓の立膝のきりぎりす　（昭和五四年）

この年の秋、八束は「秋」の会員たちと韓国に吟行に出かけて、二三句を発表しているが、これらを眺めるに八束の奮闘ぶりがうかがえよう。海外詠はやはり難しいものだ。なかなか限られた期間に、俳句にまとまるような風景に遭遇できるとは限らないのだ。

この旅行の結末がスリリングであったことは、最後の句〈穴惑ひ朴氏官邸見て帰る　八束〉に次のような前書が付されていることで分かる。「十月二十六日夕刻、山腹を走る車中より朴大統領官邸を眺む。それより空港着、飛行機の離陸二時間余り遅れ、深夜帰京。翌朝、前日夕刻の朴氏暗殺のことを知る」

さて、「きりぎりす」の句を採り上げたのは、俳句は偶然によって面白くなることがあることをこの句によって知るからだ。「韓国の妓の立膝をなせりけり」だけであれば何のことはない、ふつうの報告句にとどまり情感も平凡なものにとどまる。しかしながら、この句では、立膝にふときりぎりすが飛んできて止まった。予期せぬハプニングが一句にユーモアをもたらした。上品

なだけでは俳句の味わいは薄っぺらなものにとどまる。そこに「きりぎりす」のような雑物が入り込んで予定調和を崩すところから俳句の笑いが始まるのだ。

こころざし寒林にあり細（さざ）焚火

（昭和五四年）

前書に「拙著『三好達治』刊」とある。後に、ライフワークの一つとも言えるもう一冊の三好達治評伝『駱駝の瘤にまたがって』を刊行した八束だが、恩師・三好達治に関するこの評論も上梓できてうれしかったに違いない。

しかしながら、八束はここで手放しに喜んだりはしない。あえて気を引き締めて、自分の「こころざし」は華やかな所にはなく、「寒林」に「細焚火」をするようなきびしい次元に今も置いているのだ、と言明する。もちろん、表向きは明るく振る舞っていても、ひとたび仕事場で文筆に携わるときは、「寒林の細焚火」を抱え込んでいることくらいは、文人の世界として八束も了解している。

ただし、それでもあえて私はこの句の姿勢を貴重なものだと思う。俳句に言志を語らせるのは、ひとたび間違えば、スローガンに陥ったり不必要なポーズに見えかねたりする。しかしながらこの句について私がなお共感するのは、この句の凛と引き締まった細身の句の姿が、いつも私が接してきた八束のよい部分と重なるからだ。いつも謙虚に人生に正対して俳句の目標をきびしく保っていた八束そのものがこの句には現れている。K音や、S音が多いこともこの句の雰囲気を支えていよう。慢心を諫められるような厳しさと共に、前述したような意味でたいへん懐しい句となっている。

危な絵を隠す蔵建て冬籠り

（昭和五五年）

大人の世界に遊んだくつろいだ作品。「危な絵」という言葉の選択が文芸の世界に馴染んできた八束らしく風格がある。『日本国語大辞典　第二版』（小学館）の「あぶなえ」の項目には、「浮世絵で、女性の湯上り、更衣、階段の上り降り、または風に衣の翻るさまなどを書いた、エロチックなきわどい絵。江戸中期の鈴木春信の頃からみられ、江戸末期にもしばしば描かれた。春画とは異なる」とある。ふーんなるほど、と思うものの、庶民の市井感覚を詠み込む俳句となると、どこかこの定義通りでは胡散臭さが残る。やはり、その用例にあがっている「あぶな絵　猥せつな絵。風俗壊乱的絵画」（『超モダン用語辞典』（一九三一）隠言葉用語篇）の語感でよいのではないか。一流の

画商や豪商などが浮世絵を所蔵するために蔵を建てたというような立派な（？）話ではなくて、むしろ地方の成金地主などが蔵を建てた。「どうせあん中にはあぶな絵でも隠してるんだろうさ」と、近所の者が立ち話でもしながら揶揄している。せいぜいそんな話ではないか。しかしながら、句としては品格を保って脱線しすぎないように配慮している。大人の身だしなみみたいなものだろう。いや、昔は蔵の中に危な絵くらい隠し持っていたものさ、という向きもあろう。それはそれでも構わない。その方が、時代がかって却って陰影を深めるかもしれない。

きわどい大人の世界は普段は隠してあるからこそ意味がある。子どもは、好奇心をもってそんな秘密を少しずつ覗きながら、自然に成長してゆくものだろう。いまの世の中のように、あらゆる情報が無差別に「まるだし」にさらけ出されているのでは、刺激ばかりが前面に立って、子どもの成長というにはあまりに性急というものだ。文芸の世界もしかり。ちょっと猥褻な話なんかも小説や物語の世界にちりばめて、文芸作家は大人の「世界」をどう創造し構築するかに人生を賭ける。一方、読み手は、「蔵」でも建てるように好尚の本を集めては「冬籠り」でもするように、自分に合う文芸の世界に惑溺し埋没する。それこそが文芸の醍醐味ではないか。そんな比喩めいた世界を、この句から読み取れそうな気がする。ふだんはストイックな志向の八束の、文芸世界に対する余裕の現れた面白い句となった。

蟻地獄すさりて見れば煙りをり　（昭和五五年）

「すさりて」の措辞がすべてのような一句。蟻地獄をこの世の修羅場に重ねてみると分かりやすい。すこし離れてみると、ことの全体が煙立つように見えてくる。そのときに、後ろ向きに逃げ出すのではなくて、ものの修羅を見据えながら、後ずさりに距離を取ってゆくのだ。背を向けての敗走ではなくて、ものの正体を見極めるための後退。ここに八束の世に対する粘り強い態度を認めることもできようか。煙りたちながらも見えてくる全体像の怖さも改めて身にしみる。

身の老いの深むあけくれ行々子　（昭和五五年）

『石原八束句集』刊」との前書がある。自嘲とも言えそうな句であるが、なによりもふだん八束は「老い」を詠まない作家だった。だから余計にこの句が目に飛び込む。「身の老い」とは、やはり還暦を意識してのことであろう。

句の方は、上五中七でどちらかといえば三好達治の詩を思わせるようなこなれた文体で深々と「老い」の心情を吐露し、下五の「行々子」で途端にトーンを高くして俳諧的に切り返している。

「行々子」は夏の日ざしの下で、喧（かまびす）しい鳴き方をする。若い日に油照りのもとで喀血の生き地獄を体験した八束は、それから四十年ほど経った今、こんどは喧噪に埋もれるかのように一人深まりゆく老いを意識しているのだ。寓意的な側面もなきにしもあらずかもしれないが、そこまでの詮索は無用。

下五の季語の据え方に学ぶことが大きい。俳諧的なエネルギーを取り込むような強い生命力を感じさせる「行々子」だから、それまでの内心吐露の短歌性を大胆に「切る」ことができるのだ。「行」という鳴き声を下敷きにした音の中には、人生行路的な意味も期せずして入り込み、この句に深々とした老いの風懐を漂わせている。

蓮の花片羽くづれに吹かれをり　（昭和五五年）

蓮の花は大ぶりで凛としている。咲ききったときはまさに完成品。崩れそうな気配さえ感じさせることがない。だからこそ、この「片羽くづれ」の唐突な動きが生きてくる。一句仕立ての句だが、「片羽くづれ」とは、見立ての前提として花を翼にたとえている。その羽根の片方が、ちょっと風に崩れている。崩れながらも、風に捲がれてしまわない。この宙吊りの緊張感が独自の美意識を生み出している。音韻的には、「片羽」の「あ」音の三連続が、片崩れしながらも漂わせている軽やかさと明るさを支えていよう。

暖簾師の去るを見てより日を数ふ　（昭和五五年）

「暖簾師」とは、暖簾作りの職人などではなく、「ごまかし物を売りつけるずるい商人」（『広辞苑』）をいう。正月を目前にして、暖簾師も気合いを入れねばならぬ（？）時期なのであろうか。例にもれず八束の家にも回ってきたが、おそらく八束も気合いで玄関払いしたのに違いない。しかしながら、その去ってゆく後姿には、やむにやまれぬ事情でこんな仕事をしなければならなくなった男の哀れさが滲み出ていて、八束もいっとき同情するのであった。

暖簾師が去るのを見届けた後、自分にも他人ごとではない年の暮が迫ってきた。年詰まるほどに切羽詰まる原稿執筆と俳句制作。こちらは「まがいもの」では世に通用しないし、八束自身もそんなものを発表するつもりはない。

文筆業は暖簾師に負けじ劣らじ厳しい生業（なりわい）なのである。

コンコルド広場の釣瓶落しかな　（昭和五五年）

この年の秋、八束は「秋」の有志で十年ぶりに欧州旅行に出かけている。イタリア・フランス・スイス・スペインなどを吟行した。この時期の収穫としては、他に、次のような佳品がある。

ジプシーのカスタネットの落葉かな　八束
龕燈に寒き灯の点くグレコの家
鳴る風も落葉最中のミレーの家
トレドなるタホ河青しかいつぶり
雪の山越えてヴェニスに来たりけり
時鐘鳴るヴェニスの時雨橋幾つ

コンコルド広場（Place de la Concorde）は、パリのチュイルリー公園とシャンゼリゼ通りに挟まれている。一七五五年に造られたが、はじめはルイ一五世の騎馬像が置かれていたので「ルイ一五世広場」と呼ばれた。その後、フランス革命の勃発により、「革命広場」と名称も変わった。フランス革命の時期には、ルイ一六世やマリー・アントワネットの処刑でも知られる。やがて、「コンコルド広場」という名前で呼ばれ始めるようになった。

作者は、この広場に大きな秋の没日を眺めている。フランスの革命に見るように、時代と共に人の没落は早い。釣瓶落しの夕日にその思いを重ねているのであろう。実は、コンコルド広場から夕日が沈む方角を眺めると、そこには二十世紀の先駆けともいうべきエッフェル塔がシルエットになって聳えている。ギロチン台もさることながら、夕日の象徴する凋落の果てに新世紀のシンボルがあって、これもまた一世紀を過ぎようとしている。この句の省略された「隠し味」もまた面白いではないか。

甃（いし）の目を瞼にきざむ冬の娼婦　（昭和五五年）

この句は寒々としたパリの裏道であろう。石畳の石の目が瞼に刻まれているような街娼。革命を通して獲得した自由の影の部分を、八束は安っぽい毛皮に身を包んだこの娼婦に認めた。「瞼にきざむ」という表現は、娼婦の非常に厳しい現実をボードレール的な詩人の目で引き寄せたもの。ルオーの娼婦のように醜態をさらけ出し退廃に耐えて生きている女。そのたくましさの闇が瞼に石畳の影のように深く刻まれている。

アイガーに雪けむる日の鳩時計

（昭和五五年）

アイガー（Eiger）は、スイスのベルニーズアルプスの一峰で、標高三、九七五メートル。特に知られるのは、高さ一、八〇〇メートルの北壁。「死のビバーク」を抱えて、困難な三大ルートの一つとして知られ、遭難者も多い。

この句は、宿の窓から、そのアイガーの雪山を眺めやっているのであろう。アイガーに雪けむりが上がっている。厳しい気象条件に、これまで見聞きしたさまざまの修羅の風景が思い浮かんで、魔の山の凄絶をひしひしと感じていたのであろう。しばらくして、ふと部屋の鳩時計が鳴りだした。八束の思考は、アイガーから現実の部屋の暖かさへと引き戻されて、ようやく安らぐ。この句では、「鳩時計」がとぼけたようなユーモアラスな役割を果たしている。

神座（かみくら）の緋鯉を啖（く）らふ雪女

（昭和五六年）

神座というのは神の宿る所や降り立つ場所をいうようだが、この雪女は神座に捧げられた緋鯉を食ってしまうというのだ。真っ白な衣装の雪女の口から、緋鯉の鮮血が滴り落ちるような鮮烈なイメージの中に、雪女の業（ごう）の深さを描いたような作品かと思う。雪女は、ひょっとしたら「にんげん」を食べてはいけないと諭され、代わりに「恋」の音を埋め込んだ「緋鯉」を食し、仙女のように永遠の命を有しているのかもしれない。そんな新しい物語を考えみても、雪女の哀しい性（さが）が薄れるわけではない。雪女郎に比べて雪女の方が、（音にも沿って）よりやさしい姿に感じられるだけに、この句にみる雪女の妖怪味は、見てはならぬものを覗いてしまったようなただならぬ凄まじさを覚える。

雁帰る三好達治の三国町

（昭和五六年）

前書に「越前三国「川喜」にて」とある。この「川喜」の主人の大森杏雨さんについては、以前に触れたが、「秋」の創刊同人で三好達治疎開時代の学習会メンバーの一人でもある。この句を刻んだミニ句碑が、割烹料理のお店の前にある。

この句、何の変哲もないような句だが、春駘蕩とした中にも郷愁めいた味わいが濃く残る。「雁帰る」には、三好達治の「春の岬」に出てくる〈春の岬

旅のをはりの鷗どり浮きつつ遠くなりにけるかも〉の漂泊の春の鷗を対照的に思い浮かべる。三好の「み」と三国の「み」も春らしく穏やかに響き合っているのもよい。尚、三国町は福井県の九頭竜川の河口近くに位置していた港町で、かつての北前船の拠点。いまでは坂井市の独立行政地区の一つになっている。狭い路地に残る昔ながらの町並みを歩くと、この句の雰囲気に近いものを感じる。

第九句集『風信帖』